

(案)

令和6年度
「つどい、つながる文化の会議」
事業評価報告書

茨木市文化振興施策推進委員会

令和7年3月

目次

P. 1 . . . 常盤委員意見

P. 4 . . . 宮崎委員意見

P. 10 . . . その他

※委員会でご意見があった場合は巻末に追加予定

「つどい、つながる文化の会議」の事業内容等について

1 つどい、つながる文化の会議

(1) 茨木市文化振興ビジョン（第2期）における位置づけ

茨木市文化振興ビジョン（第2期）を推進するにあたり、多様な主体がつどい、分野を超えてつながる、共創する会議<つどい、つながる文化の会議（以下、文化の会議）>としています。この会議を通じて、多様な主体や分野をつなぐ人材が育ち、活躍することで、様々な場所・活動・主体が有機的につながり、文化的コモンズの形成の促進が期待されます。

(2) 文化的コモンズ

地域の共同体の誰もが自由に参加できる入会地のような文化的営みの総体のことです。（平成26年3月財団法人地域創造提言より）

近年、社会の複雑化に伴い、文化活動そのものだけでなく、教育と文化、福祉と文化、観光と文化、産業と文化等との広範な連携により、文化的コモンズが形成され、それが地方の活力を生み出しています。

また、文化的コモンズを形成するには、それを担う人材が必要であり、行政や文化拠点、地域における様々な担い手と連携しながら、「コーディネーター」を育成・確保する必要があります。

(3) 実施内容

令和6年10月、公募型プロポーザル方式による事業者選定の結果、サントリーパブリシティサービス株式会社と本事業の企画運営等業務委託契約を締結しました。令和6年11月には、公募による参加者の募集を行い、大学生から幅広い年代の総勢23名の方が集まりました。参加者の中には、音楽や美術作品の鑑賞を趣味にされている方や、実際におにクルのオープンスペースで演奏されている方や本市現代美術展に出品されている方もいます。

令和6年度は、「アートカフェをつくろう！」をテーマに、参加者同士で話し合いながらコンセプトブック（絵本）を制作し、コンセプトブックを用いて、令和7年3月8日の成果発表イベントを企画、当日の運営を行います。

本事業は、成果発表（イベント）に向けたプロセスによる横の関わりと、成果発表当日の外への広がりというコーディネーターの基礎的活動を経験してもらうことを狙いとしています。文化芸術を通じた人や団体との交流を繋ぐ場を活用した市内活動団体との関係構築を推進することで、文化的コモンズの形成に必要とされるコーディネーターの育成や活躍できる場の充実をめざします。

<令和6年度実施状況>

- R6. 12月1日 文化の会議①：文化振興ビジョン（第2期）の説明、
藤野一夫教授（芸術文化観光専門職大学副学長）による講義
- 12月14日 // ②：SUITA×ART（吹田市）の視察
- R7. 1月25日 // ③：イベントテーマの決定、コンセプトブックの案出し等
- 2月15日 // ④：コンセプトブック作成、イベント企画調整等
- 3月8日 // ⑤：成果発表イベント「みんなでつくろう！絵本と音楽、
つどいの場」@おにクル1階オープンギャラリー

2. 事業評価に向けた専門部会の新設

(1) 事業評価の方向性

文化施策推進委員会の下に専門部会を新設し、「つどい、つながる文化の会議」の事業評価を行います。評価にあたっては、専門部会委員として、ご就任いただきましたお二人が実際に本事業に参加しながら、評価を行う「参加型評価」といたします。

(2) 参加型評価

活動を提供する側だけでなく、活動を受ける側の立場に重点を置き、現場の状況を把握することで成果物にたどり着くプロセスも重視することができます。

3. 評価の目的

- ・来年度の事業へのフィードバック
- ・本事業の周知に活用
- ・予算要求時の資料

令和6年度「つどい、つながる文化の会議」事業評価について

①文化芸術を通じた交流の機会が充実しているか

■「交流の機会」としてのアートカフェへの満足度

設問に対して肯定する回答の割合が高く、その限りでは満足度は高かったと見ることができる。他方で、例えば第1回講義資料内容は行政職員及び事業者を対象とするような専門的内容であり、参加者の「勉強になった」が実践とどこまで結び付くものかは明確でない。自由記述で参加者が「コーディネーターとしての報酬」に言及するなど、市民コーディネーターの趣旨が十分に伝わっているか確認が必要と思われる部分もある。

■アートカフェを通じての参加者の行動等の変化

自由記述において、他の参加者と協働できた、ツール活用などに挑戦し達成感があつた、自分なりに行動できた、といった自身の成果に対する言及が見られた点が、参加者の行動変容を傍証している。各設問とも、第3回のみ、やや肯定度合が低くなる（「少し思う」が増える）が、学びの期間を終え実際に自ら企画するフェーズに入った最初にかかる健全なストレスであると思われ、その後再び肯定度合が向上したことは、参加者自身の成長を示唆している。

■アートカフェを通じた参加者同士や運営者、市民との交流

参加者同士は対話と助け合いによって、与えられた短い期間に苦勞しながら本番に向けて協働できていたと思われる。第5回終了後の振り返りでも、自分のできること（スキル）に関わることができた喜びを語る参加者がいて、反対の中には休みがちであったことを詫げる参加者もいたが、ともかく各自ができることを持ち寄ることが許容された関係性であったことが認められる。またその空気感を醸成するのに市職員が貢献していた様子も感じ取れた。ただし、アンケート集計結果や報告書、また視察によっても、参加者と受託者がどのように関わり合い、受託者が専門家としてコミットメントしていたかは読み取れなかった。

《実際に第5回の様子を見て》

参加者がそれぞれ自らの役割を認識して、各々来場者と率先して関わる姿勢を見せることができていた。来場者もそれぞれの形でイベントに参加したり、一歩外で眺めたり、出入りしたりしており、それが無理なくできていたのは、施設自体の力と、実施スタッフの雰囲気作りが奏功していたからだと感じた。他方で、素朴に楽しいイベントである一方、イベントの趣旨自体がどこまで来場者に伝わっていたかは定かではなかった。もっとも、伝わらずとも楽しそうにする子どもや来場者の存在自体が尊いのではあるが、他方で運営者が、場のコンセプトをどこまで維持し、どこまで確信的に放棄していたかは読み取れず、その判断を誰が担うかも曖昧であったように見受けられた。ただし、この評価は会議参加者に向けるべきではなく、受託者や市が検討すべき事柄である。

【コメント】

物事に取り組む際、最も難しいことはそれを始めることである。今回の朗読会/ワークショップを開催するにあたり、初めてのメンバーで試行錯誤しながら協働してきた参加者の成果は大きいと言える。他方で、イベント自体について言えば、進行 MC スキル、会場設営状況(机やスピーカーの配置等)、来場者との接し方、臨機応変な進行内容のシフトなどについて、随所に伸び代があった。あるいは、専門的な立場から助言があれば回避できたものもあった。それは参加者の満足度にも関わることであり、そうした専門的な下支えは受託者(及び市)の役割であると思われる。市民ののびのびとした良質な活動体験を支えるための専門性が問われており、自由な雰囲気は大切であるが、受託者を始めとする実施者側は素朴なアマチュアリズムだけでは乗り切れない。ただしこうした見立ては、評価者がまだ一度も受託者と対話したことがない中での一方的な所感であり、確定的な評価とするわけにもいかない。

②だれもが文化芸術とつながる環境がつくられているか

■note 記事のビュー数、いいね数

■事業、イベントを知ったきっかけ

■事業周知のため工夫

※来場者アンケートが回収に至らなかったこと及び評価時にデータの提供が間に合わなかったため省略

【コメント】

アンケート QR コードの場所が分かりにくかったのが回答数に影響している。評価者自身も掲示場所をなかなか見つけられず探して回っていた。また、その日のイベントの趣旨が MC からは理解が難しく、アンケートも回答しづらかったのではないだろうか。参加者にとってみれば、まずは何であれ実施することに大きな意義があるが、他方で厳しい言い方をすれば身内のためだけになっていた部分もあり、イベントとしての質を高めるための十分な準備期間、そしてサポートが事業運営側には求められると思われる。

③気軽に文化芸術活動に参加できる機会、きっかけが充実しているか

■イベント来場者数、属性等

■文化芸術にふれる機会としてのイベントの満足度

■コンセプトブックに対するイベント来場者の感想

※来場者アンケートが回収に至らなかったため省略

■イベント当日の来場者の反応

《実際に第5回の様子を見て》

朗読会、マップ作り、色塗りなど、各セクションで来場者はそれなりに楽しむことができていた。た

だし来場者には、例えば色塗りが「絵本の最後」という趣旨も伝わっていないし、つまり朗読会で上演された絵本は完結していないということも全く伝わっていなかった。ただ、大変よい絵が並んでいた。マップも、せっかく作ったのに掲示して終わりではもったいなく、書き込んだ人にコメントをもらって全体に紹介する工夫があればよかった。色塗りの絵も同様に、飾るだけではなく紹介するなど、もっとインタラクティブだと、イベントの趣旨にも近づくことができたのではないかと思います、準備したワークをやってもらうだけの場になりがちだったのがもったいなく、これは会議参加者に対しては批判ではなく伸び代だと理解されたい。

【コメント】

これは事業評価ではなくフィードバックに近いが、イベントは全体として非常によい光景が広がっていた。それこそ朗読と関係なく風船で遊ぶ幼児や、朗読会を聞く客席の一蹴外でずっと編み物をしているが、特に去るわけではない女子高生、通りすがりの親子で「音楽やっているね、観に行こうか」と会話しながら近づいてきた人たちなどがいた。こうした幸福な偶然の来訪者をどのように迎え入れながら、時に柔軟に内容を修正しながら場を作っていくかが大切である。反対に、場づくりのためには、市の事情等で行われる挨拶はむしろカットした方がよい。今回の経験を通じて、今後は「場にとって何が必要か」という発想からの当日運営について語り合われるとよいのではないかと思った。

総括

市民がそれぞれにできることを持ち寄り、場を実現した様子は極めて尊く、参加者自身の試行錯誤、忍耐、貢献に最大限の敬意を払いたい。他方で、「アートとは何か」「どんなイベントが地域にとってあるとよいか」「当日の運営はいかにして質を上げられるか、インクルーシブにできるか」というイベントのクオリティに関する目標は、少なくとも受託者及び市の側では明確にしておく必要がある。これは市民のレベルが低いという話をしていないのではない（そしてそれは全くそうではない）。いかに市民が互いに高め合うことができるのか、そのための仕組みや環境をどのように設定することができるのかという問題と理解されたい。実施側としても初めての取組であり、やってみたことで得られた気づきがたくさんあるだろうと思う。市民主体というとき、それは必ずしも運営は一步引くという意味ではない。受託者及び市もまた、市民とは別の役割の下、一緒にコミットメントしていくのが理想である。

※事業評価にあたっての、アンケート結果等のデータについては、受託者からの実施報告等を参照

令和6年度「つどい、つながる文化の会議」事業評価について

1. 本事業の目的と背景

1-1. 茨木市文化振興ビジョン(第2期)における「文化的コモンズ形成」

茨木市では、文化振興ビジョン(第2期)のなかで「文化的コモンズ」という概念を重視している。文化的コモンズとは、地域の多様な文化芸術に関わる人々(アーティストや愛好家だけでなく、市民全般も含む)が、自発的に集まり、共有し、互いに分ち合える“文化的な入会地”のような場所やネットワークを目指す。これは市場原理や行政の権限だけでは形成しきれない、人間的価値(信頼・連帯・団結・共創)を育む社会インフラとなり得るものであり、公立文化施設は、こうした文化的コモンズの拠点として機能する可能性を秘めており、“地域の記憶と共感”を繋ぎ続ける「装置」であることが期待される。

ところが、図書館法・博物館法・劇場法・社会教育法などそれぞれ別の根拠法によって設置された施設は、どうしても縦割り行政に陥りやすい側面がある。加えて教育委員会と首長部局の連携や、分野ごとの業界団体(日本博物館協会・日本図書館協会など)の縦割り構造も重なり、施設間・事業間の統合的な連携を難しくしている。

1-2. コーディネーター育成の必要性

そうした縦割りや分断を超えて、人と人、施設と施設、分野と分野を繋ぐ「越境者」が必要であり、その役割こそがコーディネーターといえる。コーディネーターは「文化芸術を通じて異なる者同士をつなぐ人」「異なる分野と文化芸術をつなぐ人」であり、事業を企画・調整・実施するうえで重要なハブとなりえる。文化的コモンズを形成するためには、このコーディネーター人材の育成・確保と、彼らが活躍できる環境整備が不可欠である。

本事業では、そうしたコーディネーターの初期的な学びの場として「アートカフェづくり」を取り上げ、市民が主体的に集まり議論し、実際にイベントやコンセプトブック作りを行うプログラムを実施するものである。

1-3. アートカフェの位置づけ

「アートカフェをつくろう」(最終イベント名は「みんなで作ろう!絵本と音楽、つどいの場」)は、市民が気軽に立ち寄り、コーヒーを飲みながら対話できる“お茶の間のような場”をイメージしているのであろう。そこには専門の知識や芸術活動経験がなくても参加できる敷居の低さがあり、市民同士が「こんなことをやってみたい」「この地域のこんな文化資源を活用できないか」といったアイデアを出し合うことで、新たなつながりを生み出すことが狙いであった。これらの活動を通じて、市民一人ひとりがコーディネーター的視点を身につけ、市内の文化芸術資源を再発見・発信し、ゆくゆくは地域のシビックプライド向上にも寄与することが期待されるものである。

2. 公共文化施設における縦割りと文化的コモンズの可能性

2-1. 公立文化施設の縦割り構造

図書館や博物館、公民館、劇場など、公立文化施設にはそれぞれ異なる根拠法や運営上のミッションが存在する。また教育委員会と首長部局の管轄が異なる場合、予算執行・人事異動・議会報告など、さまざまな手続きが別々に行われるため、一体的な運営を行いきにくい面があるのも事実である。さらに、図書館界・博物館界・劇場ホール界など業界団体や学会も縦割りであるため、施設間交流や情報共有の機会は限定的になりがちである。

2-2. 文化的コモンズの意義

一方で、地域住民の視点から見れば、「図書館か博物館か」よりも「どんな面白い体験ができるか」「どんな人と出会えるか」が重要となる。文化的コモンズは、こうした利用者側の視点に立ち、施設の垣根を取り払って多様な人々が交流し、学び合う場を拡張していく概念とも言える。ここにコーディネーターが入り込み、越境的に人々や団体を繋ぐことで、実際に縦割りを乗り越えた連携事業が実現しやすくなる可能性がある。「アートカフェ」のように一つの文化拠点を中心としながら、参加者自身がコンテンツ(企画・アイデア)を持ち寄り、新しいプロジェクトを自由に立ち上げることも可能となる。

2-3. コンテンツを持たない文化施設と地域資源

特に「コンテンツを持たない」施設においては、地域に眠る文化資源やアーティストを巻き込んでプログラムを創出することが重要である。茨木市には川端康成にまつわる文学的遺産がある一方で、現代アート・音楽・演劇など多種多様な芸術活動が日々生まれている。コーディネーターがこうしたアーティストや技術専門職、さらに市民との橋渡しを行うことで、公共文化施設が“自らのコレクションを核とする”のではなく、“地域そのものをコレクションとみなす”ようなアプローチが可能となる。これこそが文化的コモンズが持つ真のポテンシャルといえるのではないか。

3. 本企画の概要と成果

3-1. 連続ワークショップ・イベントの流れ

本事業では、令和6年12月から令和7年3月にかけて計5回のプログラムを実施した。初回は参加者同士のアイスブレイクと“文化的コモンズ”の概念紹介、2～3回目は他市の事例視察やアイデア創出ワークショップ、4回目は具体的なイベント準備やコンセプトブック(絵本)づくり、5回目には市民向けの発信・交流イベントを開催し、成果披露とともに新規来場者も巻き込んでコミュニティを拡大する形をとった。

3-2. コーディネーターの育成と役割の実感

各回のプログラムでは、参加者自身が“運営側”の視点を持てるようにファシリテーションや企画運営のノウハウを実践的に学ぶものとなった。たとえば「普段は芸術なんて縁がない」と思っていた市民が、ワークショップを重ねるうちに「誰かと何かを作り上げることが面白い」「自分にも地域を繋げる役割がある」と気付いたケースがあったことがアンケートコメントから確認できた。アー

トカフェを設定することで、“自分の好き”を持ち寄り、それを核に人を巻き込み、結果的に茨木市の文化資源を改めて発見して発信できるようになる——そのようなプロセスに参加者が自然と関わる構造ができあがっていたことが確認できた。

3-3. 成果物「コンセプトブック(絵本)」の活用

本企画のユニークな点として、参加者が共同でオリジナル絵本(コンセプトブック)を制作し、それをイベントで朗読・展示したことが挙げられる。この絵本は、アートカフェや文化的コモンズとは何かをわかりやすく物語に落とし込み、子どもから大人まで共感を得られるツールとして機能しました。実際に音楽と合わせて朗読することで、来場者が視聴者としてだけでなく「自分ならこの物語をどう続ける?」といった参加者意識を持ちやすい工夫が加えられている。

3-4. 第3回「どんな『場=アートカフェ』にしよう?」に参加した所感

第3回のプログラムでは、初回から2回目までで共有された「文化的コモンズ」やアートカフェのコンセプトを基に、具体的な場づくりへと参加者が踏み出す重要なステップとなった。イントロダクションでは、受託者職員が第1回・第2回の振り返りとゴールの再確認を行い、参加者の緊張を和らげつつ全体の認識を統一することで、誰もが具体的な取り組みに入りやすい環境が整えられていた点が印象的であった。

続く全体パートでは、「アートカフェをどのような場にしていきたいか」というテーマのもと、参加者全員が自由に意見を出し合い、交流を深める雰囲気醸成された。特に、民主的にキーワードを絞り込むゲーム形式の進行では、受託者職員の柔軟なアイデアとファシリテーション力が、参加者の創造性を引き出す効果を発揮した。

その後のグループワークでは、事前に設定された「絵本作り」や「アートカフェ作り」などのテーマに沿い、各グループが担当分野(企画、デザイン、ブランディング、イベントなど)ごとに意見交換と具体的な作業に取り組んだ。受託者職員や市職員が各グループを定期的に訪問し、進捗確認や多角的な視点からのアドバイスを行うなど、必要なタイミングでサポートが提供されたことも、参加者の安心感と実行力向上に寄与した。

ただし、各グループにリーダーが配置される一方で、参加者の主体性を尊重するあまり、役割分担や進行の明確化がやや不足していた場面も見受けられた。今後は、主体性とリーダーシップのバランスをより一層明確にする仕組みが、さらなる円滑な運営へと繋がる改善点といえる。

4. アンケート結果から読み解く参加者の意識変容

ここでは、本事業に関連して実施されたアンケート結果の考察を中心に述べる。

4-1. 初回の高揚感と新奇性(「非常に思う」77%などの高率)

初回参加時には、回答者の大多数が「非常に思う」と回答しており、新しい体験への興味や期待感の際立ちが確認できる。初めての場・初めて会う人との交流という新奇性が、参加者のモチベーションを強く引き出していることがうかがえる。

4-2. 2～3 回目での一時的落ち着き(「まあまあ思う」への移行)

しかし、2 回目・3 回目になると「非常に思う」の割合が減少し、「まあまあ思う」が増える現象が見られる。これは初回特有の刺激が薄れてきたことに加え、「次は具体的にどう動けばいいのか」「まだ十分に役割分担や自分の強みが明確でない」といった手探り状態であることを反映していると考えられる。ここで一時的に熱量が落ち着くのは“自然なプロセス”であり、「本当にこの場が自分に合っているのか」を参加者が再評価する時期とも言える。

4-3. 4～5 回目での再高揚(「非常に思う」の回復と地域連携意識の強化)

その後、4 回目から 5 回目にかけて再び「非常に思う」が上昇するのが特徴的である。アンケートでは「役割がはっきりした」「みんなでコンセプトブックを作り上げる過程で仲間意識が深まった」「地域貢献や家族・友人への波及を実感した」という反応が増え、改めてモチベーションが高まる様子が確認された。特に「家族や友人に広めたい」の項目が後半で大きく伸びる点からは、アートカフェでの体験が個人の内面変化にとどまらず、コミュニティ全体への波及効果を生み出していることがうかがえる。

4-4. 自由記述に表れる「やってみよう」「まざりあう」「自由なテンポで」の姿勢

定量データだけでなく自由記述では、実際にいろいろな人と対話をしてみたら面白かった、お互いの意見を交わすことで、この地域にこんな活動があると知ったなど、多様な人やアイデアに触発されるポジティブな記述が散見された。ここには“異なる分野・世代がまざりあう”ことそのものを楽しみ、さらには「何か新しい活動をやってみたい」という主体的な意欲が醸成されていることが読み取れる。すなわち、文化的コモンズとコーディネーターの役割が実践を通じて参加者に理解されはじめている段階と捉えることができるのではないか。

5. 運営上の課題と改善点

5-1. 役割分担・運営依存のリスク

一方で、アンケート自由記述や事務局メモには、「参加意欲には差があり、熱心にリーダーシップを取る人と、様子見の人で負担が偏った」「運営スタッフ(委託会社や市職員)に頼りすぎてしまった」という声が見られた。誰もが初めて取り組む場であるため、すべてを上手く回すのは難しい側面があるが、今後は参加者の主体性は尊重しつつできる範囲でのマニュアル化やオンラインツールの活用など、参加者全員が動きやすい仕組みづくりを行うことで依存リスクを減らすさらなる工夫が求められる。

5-2. アートカフェが「手段」であることの共有

また「アートカフェづくり」そのものがゴールになり、本来の目的——すなわち茨木市の多様な文化資源を発掘・発信し、市民のシビックプライドへ繋げることを見失わないよう注意が必要である。初回や最終回で改めて「なぜこの場を続けるのか」「私たちが目指す文化的コモンズとは何か」を話し合い、本質的なゴールを全員で共有する場面を積極的に持つことを意識してほしい。

5-3. 継続的なコーディネーターの活躍環境

コーディネーターの育成には、イベント単位の参加にとどまらず、長期的に学び合う環境や、新しいプロジェクトを横展開できる機会づくりが重要である。アフターフォローや他の文化施設・団体とのマッチングなど、市や文化財団等また文化施設等がしばらく伴走する仕組みがあると、コーディネーターが現場で実践→学習→次の企画へ発展というサイクルを回しやすくする必要がある。

6. 今後の展望と提言

6-1. “縦割り”を超えたネットワーク強化

茨木市内の各文化施設（図書館、生涯学習センター、文学館など）同士はもちろん、近隣都市の公共施設や NPO とも連携し、より広い範囲で文化的コモンズの輪を広げることが期待される。コーディネーター人材が越境的に歩き回り、様々なセクターの人々を繋ぐことで、縦割りを実質的に解体していく事例が増えれば、今回のアートカフェ以上に多彩なコラボレーションが生まれることとなる。

6-2. 地域の文化資源の再発見・発信

次回以降のプログラムでは、より意識的に茨木市の固有文化資源を取り入れると、参加者のシビックプライド向上にさらに寄与できる。たとえば、川端康成ゆかりの地をフィールドワークし参加者が新たな解釈や物語を作って発信する試みや、茨木市を拠点とするアマービレフィルの社会貢献イベントと連動した情報発信、さらには郷土玩具や地域伝統の楽曲を現代風にアレンジするワークショップなど、地域に根差した企画が想定される。「自分たちのまちには面白いものがたくさんあるんだ」と再認識できる機会が増えれば、文化活動への愛着が生まれ、その先の市民による自主活動や連帯へとつながる可能性が高い。

6-3. コーディネーター育成プログラムの整備

さらに、茨木市のビジョンに沿ってコーディネーター人材を増やすためには、単年度の取り組みに留まらず、段階的（初級・中級など）にステップアップできる学習機会を提供することが望まれる。無償の市民活動としてのコーディネーターと、より実務を担う有償のコーディネーターなど、実施者側の働くスタンスを明確に区分し、他都市の研修や文化ファシリテーター向けの講座の導入、さらにはアーツカウンシル的な仕組みの構築を通じて、実務面での責任を伴うコーディネーターに対する謝金や補助を検討するなど、長期的視点での支援体制の整備を目指すことも視野に入れてほしい。

6-4. アンケート活用と成果評価のブラッシュアップ

今回のアンケートからは、参加者の意欲が回を追って変化し、最後に大きく盛り上がるプロセスが鮮明に捉えられた。しかし、今後さらに評価指標を洗練させることで、より具体的な成果（例えば「他の市民活動との連携が何件生まれたか」「新たなプロジェクトの数」「リピーター率」など）を可視化できる可能性がある。事業自体が拡大していくほど評価も複雑化するため、継続的なアンケートやヒアリングで定量・定性データを蓄積し、毎年度の PDCA サイクルで改善していくことが望ましい。

7. 結論

今回の「アートカフェをつくろう」をはじめとする市民参加型の連続プログラムは、茨木市が推進する文化振興ビジョン(第2期)の柱である「文化的コモンズ形成」の具体的な一歩になったと考えられる。特にアンケート結果からは、参加者の意識が 1. 初期の高揚感 → 2. 一時的な落ち着き → 3. 再度の高まり(地域連携や周囲への波及) という段階を経て進化している様子が明確に読み取れる。これは、アートカフェが単なる座談会で終わるのではなく、参加者同士が共同目標(コンセプトブック制作など)をもつことで深い対話を重ね、市民がコーディネーター的視点を身につける学習プロセスが内在していることを示していると思われる。

ただし、この流れを持続し、茨木市全体の文化的コモンズを本格的に育てていくためには、縦割り構造の課題解消・コーディネーター支援・自主的な運営ノウハウの共有など、いくつかの要改善点が確認される。加えて、アートカフェという“手段”を盲目的に追うのではなく、あくまで市民が文化芸術を介して地域を豊かにし、シビックプライドを高め合う“目的”を見失わないことが重要である。

最後に、公共文化施設は市場原理や行政の権限だけでは成立しない“人間的価値”を生み出す社会インフラとして期待される存在である。その価値を最大限に発揮するためには、まさにこうした市民参加型の越境的な取り組みこそがカギとなる。参加者が多様な背景を持ち寄って学び合い、新しい企画や場づくりを自ら考え実行していく姿は、文化的コモンズの芽が力強く育ち始めた証といえる。今後も、この芽をしっかりと支え、行政と市民が伴走しながら大きく育てていくことを期待する。

※事業評価にあたっての、アンケート結果等のデータについては、受託者からの実施報告等を参照